

# 日本国一の宮

発行所 全国一の宮会  
〒633-8538  
奈良県桜井市三輪1422  
大神神社内(全国一の宮会事務局)  
TEL 0744-42-6633  
FAX 0744-42-0381  
編集 全国一の宮会事務局  
第 三 号

## 【令和三年度 総会概況】

### 【令和三年度 総会審議事項】

前年度同様、議案送付形式とし、「令和二年度会務報告」「令和二年度決算」(監査報告)、「令和三年度事業計画(案)」「令和三年度予算(案)」「総会・役員会開催の件」は書面にて全ての議案は十一月十日の集計にて原案通り承認頂きましたので茲にご報告を申し上げます。

### 【令和二年度 会務概況】

令和二年度の会務概要をご報告申し上げますと、事業予定しておりました役員会並地区会員打合せ、総会、研修会は前記の通り中止となり、自然、会務は事業頒布品の各社への発送が主となりました。コロナ禍の中にあっても全国の崇敬者が巡拝に要する朱印帳やガイドブックを求められ祈りの巡拝が行われていることに思い致し事務を執り行った次第です。

## 【令和四年 業務予定】

前号でも予告致しました通り、令和四年は沖縄県本土復帰より五十年となりますことから、九州沖縄地区の皆様へ御世話頂き、琉球國一の宮 波上宮にて初秋九月頃を目処に総会・研修会を開催する運びで企画を進めておりますので、ご予約下さいますようお願い致します。また総会の打合せとなる令和三年度後期役員会、九州沖縄地区会員打合せは筑後國一の宮 高良大社にて開催の運びですので併せてご予約下さいませ。

各位には当会の活動が地域社会の発展と安寧に資すべく一層のご教導を願ひ上げますとともに、来る総会には多くの会員皆様との再会がなされますことを只管に念願する次第であります。

### 【総会関係 事務局報告】

新型コロナウイルス感染症の蔓延拡大は未だ終息の気配は見せず、「コロナ禍」というと

という言葉が常態化しています。身近な周囲でも新しい生活様式ということ、様々な分野・立場・視点からこれまでの暮らし・振りが見直され、更には将来の生活の在り方について各々が真剣に向き合うことになったことは「禍転じて福と為す」の前兆ではなからうかと感ずるところであります。

扱って、令和二年度総会前号で既報の通り世情を鑑み已む無く中止とさせて頂いた頂きました。当年度の各種総会承認議案は各地区支部長・副支部長を通じて会員各神社へ議案送付し原案通り承認となり、議案第五号「令和三年度総会・役員会開催の件」に基づき、令和三年が東日本大震災より満十年であることから九月に陸奥國一の宮鹽竈神社にて開催し、研修会では東北の復興状況を視察する運びでありましたが、此方も総会準備に取り掛かる七月に改めて開催について会長以下役員に諮り、現況の感染症の蔓延下では全国各地より会員が一堂に会するのは安全面に於いて万全では無いことと判断し中止と相成りました。

茲に、総会準備を進めて下さいました鹽竈神社鍵宮司様を始

め北海道東北地区役員会員皆様に対し感謝の意を申し上げる次第であります。

そこで、今号では三年度の東北地区での総会研修会開催は叶いませんでしたが、全国会員一同が東北被災地へ想いを寄せられる誌面をと編集部で企画させて頂いた、社務ご多端の折にも拘わらず、ご当地でご奉仕の皆様より「東日本大震災より十年を経て」のご感慨をお寄せ頂きました。近年は地震をはじめ異常気象による風水害など何時何処で如何なる時に災害に遭遇するか分からない時代であります。ご寄稿頂きました内容は各神社奉仕の上、氏子崇敬者との関わりの中で沢山の示唆を与えて下さる内容ですので、多くの皆様方にお読み頂ければと存じ居ります。



琉球國一の宮 波上宮

## 神事を通して気づくこと

副会長 利根康教



新型コロナウイルス感染症という未知のウイルスに人類が対峙するようになってから、随分長い時間が経ちました。我が国においては、昨春に史上初めての緊急事態宣言が発出され、それに伴い外出自粛などが要請されたことにより、我々を取り巻く生活環境は一変しました。斯界においても例外ではなく、多くの神社で様々な祭典・行事の中止・延期・縮小が余儀なくされたことと存じます。

連綿と続く神事等を中止ないし縮小することは誠に畏れ多いことではありますが、同時に伝統の継承に際し、祭りの本質を窺い知り如何に多くの人がそれを支えているのかということを考えて時間をいだけたのも事実です。

昨日までの常識とは全く異なる事態に直面したことで、ともすれば当たり前と思っていたことに気づくことができたのは、非常に有難いことでした。

このウイルスは「人との距離を遠ざける」といわれ「ソーシャルディスタンス」なる言葉も生まれました。しかしながら、日本が世界に誇る「お互い様」「お陰様」の精神を再認識することもでき、そういった観点では「こころの距離」はどこか縮まったような気もするのです。

さて、「一の宮」と「国府」「総社」が重要な関係性を有していることは、ご承知のことと存じます。当寒川神社が鎮座する「相模國」には、この関係性を今に伝える、古式床しい祭典がありますので、ご紹介させていただきます。

相模國府祭は毎年五月五日、神奈川県中郡大磯町国府本郷において斎行される祭典で、相模國一の宮寒川神社をはじめ、二之宮川勾神社、三之宮比々多神社、四之宮前鳥神社、平塚八幡宮、そして総社である六所神社を加えた六社が祭場に参集し執り行われます。神

奈川無形民俗文化財に指定されており、古くは「端午祭」「天下祭」とも呼ばれていました。神揃山といわれる場所で斎行される古式「座問答」と、神揃山に近い大矢場で斎行される「神対面・国司奉幣」、大きく分けてこの二つの神事で構成されています。

國府祭は千年以上の長い歴史を有する祭典といわれておりますが、詳細は不明です。大宝律令制定以後、国の行政官として中央より派遣された「国司」は、赴任にあたり国内有力諸社への「巡拝」を行っていましたが、その煩雑さから次第に制度は簡略化され、國府付近に国内諸社の御霊を合わせ祀る「総社」を設け巡拝するようになりました。時代の流れとともにこれらの慣例は徐々に姿を消したものの、神社祭祀の中にその姿を残しています。

「神対面・国司奉幣」のように、総社に国内諸社を合わせ祀る形式を有した神事は各地に見受けられますが、相模國府祭における古式「座問答」のような神事は他にない國府祭特有の神事といえます。

相模國はかつて、相武と磯長に分かれていましたが、両国の合併により寒川神社と川勾神社のどちらが一之宮になるかを決せざるを得なくなりました。古式「座問答」は、その寒川神社と川勾神社の一之宮争いを儀式化したものです。神前に向けて一之宮と二之宮が、神座に見立てた虎の皮を交互に敷き進め、これを三度繰り返すと三之宮の国司が「いづれ明年まで」と仲裁に入ります。歴史上では寒川神社が相模國一之宮となつていますが、神事の上では翌年に先延ばしにされること千年以上、争いを好まない神様らしい円満解決の方法が示され続けています。

新型コロナウイルス感染症に限らず、世界には解決すべき課題が山積しています。それを打開しようとする争いが起こることもしばしば、人類の歴史は争いの歴史であるともいえます。従来の常識が通用しにくい時代を迎え、この歴史も変革が求められているように感じます。「争いのない円満解決」。千年以上の時を経て、神事から学ぶことも多いと痛感します。

(寒川神社 宮司)

# 一の宮信仰の変貌——中世から近世にかけて

渋谷申博 (日本宗教史研究家)

はじめに

名実ともに地域を代表する神社である一の宮は、古くから崇敬の対象となってきた。しかし、その信仰は時代によって変化をしてきたことも事実である。朝廷を守護する名神から「国」の人々から崇拜される靈威社へ、そして、巡拝の対象へと。本稿ではその一端を中々近世の旅の記録から探ってみたい。

一、地元との結びつきを強める一の宮



渋谷申博先生

一の宮制度の成立に関わる史料は残されておらず、いつ、どのように成立したのかはつきりしたことはわかっていない。しかし、仁和四年(八八八)に始まる一代一度大神宝奉獻で神宝奉獻を受けていた五十社のうち二十九社がのちに一の宮になっていることなどから、一の宮には朝廷守護の靈験が期待されていたことが想像される。こうした一の宮制度に変質が起ころのが十二世紀である。この頃から各地の一の宮は在地の人々の関わりを深めていくようになったことが、一の宮神社の年中行事の変化からもうかがうことができる。

鈴木聡子氏によれば、「ここから(賀茂別雷神社・松尾社・

春日社・石清水社・住吉社・宇佐宮の年中行事に関する資料の分析からの意、引用者注)、律令祭祀で最も重要視されていた祈年祭や稲の収穫祭に対応する行事が、平安時代以降の中世における神社年中行事のなかで、必ずしも行われていなかったことがみえてくるのだ。一方で、田植え・田遊びに関わる行事についてみると、共通して神社年中行事として行われていたことがわかる<sup>(1)</sup>という。

そして、鈴木氏はそうした行事が始まった時期(十二世紀)は「二十二社や一宮が共通して神領を拡充し、神社の経済基盤が安定していく時代」であったと指摘し、年中行事の変化は「神社が鎮座する在地の生活と直接

的に関わる祭祀を重視」したからであろうと結論している。

律令制度が確固としていた時代は朝廷より名神と認められ奉斎を受けることが重要であったが、朝廷の力が弱まってくると地域の人々から靈威ある神社と認められ、崇敬されるようになることが必要となったわけである。

こうして一の宮は「国」の信仰センター的な性格を帯びてくるわけであるが、その名声は国境を超えて広まっていった。その様子は、後白河法皇が編纂した今様集『梁塵秘抄』(一一八〇年頃成立)にもうかがうことができる。拾い上げていくと、きりがなが、たとえば、有名な次の歌には鹿島神宮・香取神宮・諏訪大社・洲宮神社(安房国二の宮)・熱田神宮(尾張国三の宮)・多度大社が取り上げられている。

「関より東の軍神 鹿島香取諏訪の宮 また比良の明神 安房の洲滝の口や小鷹明神 熱田に八剣 伊勢には多度の宮<sup>(2)</sup>」  
 このように列挙するのではなく、一社一首で詠まれたものもある。一の宮を題材としたものを拾ってみると、南宮大社、吉備津神社(備中国)、住吉大社、大神神社、賀茂社、嚴島神社などがある。

「一の宮」という称号も広く知られるようになっていたことも、中世三大紀行の一つとされる阿仏尼の『十六夜日記』(一二八三年頃成立)に次のような一節があることから知られる。

「又、一宮といふ社を過ぐとて、一の宮名さへなつかし  
 二つなく三つなき法を  
 守るなるべし<sup>(3)</sup>」

ここで詠まれている「一宮」は尾張国の真清田神社である。

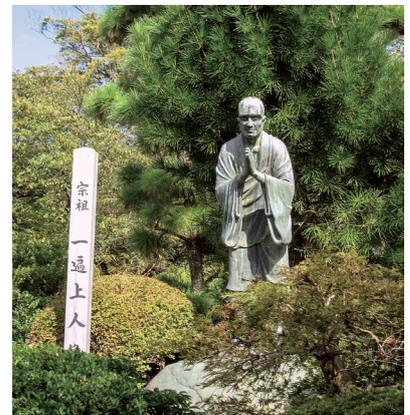
訴訟のための旅という心細い中で、一の宮を参拝することで心強さを得たことがわかる。なお、阿仏尼は三嶋の明神(三嶋大社)でも参拝し、歌を奉納している。



尾張国一之宮 真清田神社

二、一遍の一の宮巡拝  
 こうして一の宮への信仰が一般に広まってくると、意識的に巡拝しようという者も現われてくる。その早い段階の一人が、阿仏尼と同時代の一遍であった<sup>(4)</sup>。

言うまでもなく一遍は時宗の開祖であるが、篤い神祇信仰を



一遍上人像 (藤沢市 清浄光寺)

もっていたことでも知られる。一遍が専修念仏の道を選びながら、生涯「神明仰崇」の念を抱いていたことについて、大橋俊雄氏は次のように述べている。

「思うに『神明仰崇の界は、国土豊饒なり』(『念仏者追放宣状事』)、国土が豊かなのは神が守護してくれているからだといった、古代的伝統的思想と、インドの神が仏のすがたとなって日本にきたのだという本地垂迹の思想を素直な気持ちで受け入れていると同時に、諸天善神を仏法守護の神とみていたからである<sup>(5)</sup>」

こうした面もあるであろうが、それ以上に一遍は生涯の重要な場面で神のお告げを受けきることが大きいと思われる。熊野権現の神託により念仏信仰への迷いを断った話が有名であるが、大隅国一の宮である大隅正八幡宮(鹿児島神宮)でも一遍の信仰の指針となるお告げを受けている。『一遍聖絵』(『一遍上人絵伝』)では、その時のことをこう記録している。

「さて大隅正八幡宮にまうて給けるに御神のしめし給ける哥  
 とことはに  
 南無阿弥陀仏と、なふれは  
 なもあみたふに  
 むまれこそすれ<sup>(6)</sup>」

この『一遍聖絵』は一遍の十回忌にあたる正安元年(一二九九)年に、一遍の弟子の聖戒が詞書を記し、画僧の円伊が絵を描いたものである。一遍の死から間もないこともあつ

て、その詞書や絵は祖師を偉大にみせるための誇張などは多少あるものの、一遍の事績を正確に伝えていいると考えられている。とくに風景描写の精密さはすばらしく、当時の社寺の様子を今に伝える貴重な資料ともなっている。たとえば、第六巻第二段・第八巻第三段・第十巻第二段・同第三段には、参詣者で賑わう三嶋大社・中山神社(美作国)・吉備津神社(備後国)・嚴島神社が描かれている。

おそらく一遍にとって霊社への参拝は、自己の信仰を確かめるためのものであったのだろう。積極的に一の宮を参拝しているのも、そのためと思われる。以下、年代順に一遍が参拝した一の宮を列挙してみよう。

建治二年(一二七六)

大隅正八幡宮(鹿兒島神

宮)・嚴島神社

弘安五年(一二八二)

三嶋大社

弘安八年(一二八五)

中山神社

弘安九年(一二八六)

住吉大社

弘安十年(一二八七)

吉備津神社(備後国)・嚴

島神社

正応元年(一二八八)

大三島神社(大山祇神社)

最晩年の正応二年(一二八九)

には病を押して淡路島に渡り二の宮(大和国魂神社)を参詣している。興味深いのはその時の一遍の言葉である。

「聖おほせられけるは出離生死をはかゝる神明にいのり申へきなり世た、しく人すなをなりし時勧請したてまつりしゆえに本地の真門うこく事なく利生の悲願あらたなるものなりと」(迷いのこの世を離れて浄土に往生することを、このような神にお祈り申し上げるのが一番よいの

です。世が正しく人が素直であった時に、お祭り申し上げたのですから、根本の仏のお教えは揺らぐことなく、衆生を救おうという悲願はあらたかなものです<sup>(7)</sup>。

一遍のいう「かゝる神明」が何を指すのか定かではないが、一の宮や二の宮に祀られるような神に対する信仰心が心を清め、ひいては極楽往生に導くのだと考えてよいだろう。

三、一遍の信仰を継ぐ者たち

一遍一の宮信仰は完全な形ではないものの、後世に受け継がれていった。その一つが「遊行上人のお砂持ち」である。

これは時宗第二代遊行上人、他阿真教が正安三年(一三〇一)に北陸を遊行した際、氣比神宮の参道がぬかるんで参拝者が難儀しているのを見かね、時宗の宗徒や氣比神宮の神職、地元



遊行上人のお砂持ち像(福井市氣比神宮門前)

民衆などとともに海岸から砂を運んで参道を整備したことをいう。以後、時宗では遊行上人(時宗総本山清浄光寺の住職)が代替わりするごとに氣比神宮で「お砂持ち神事」を行なってきた。

一方、一の宮に自己の信仰のありようを問う姿勢は連歌師<sup>(8)</sup>に引き継がれた。

たとえば、連歌の大成者・宗祇は『新撰菟玖波集』の編纂を無事終えることができたこ



筑前国一之宮 住吉神社 (福岡)

とへの報恩として、明応四年(二四九五)、当代一流の歌人三十人の和歌百首の短冊に自らの署名を添えて長門国一の宮の住吉神社に奉納している。

この住吉神社について宗祇は、その紀行文『筑紫道記』に「和光の誓ひ何れもをろかには侍らねど、別わかきて住吉明神は、文武を守り給へり。此道は両輪の如し。国家を治めむ人は、此御神の心を観ずべき事とぞ覚え侍る(9)」と述べている。

宗祇は『筑紫道記』の旅で筑前国一の宮の住吉神社も訪れているが、当時は戦乱の影響で「楼門半ば破れて、社壇まつたも全まからず」という状態であった。それにもかかわらず、「端々語るも有難く、道の正道の願ひ、愈頼もしくて」と歌道の隆盛を祈願している。

もちろん、宗祇のこうした信仰は住吉神が歌道の神とされてきたことに基づいているが、一の宮ということも強く意識していたものと思われる。というのも、宗祇は文安二年(二四四五)頃から伊予国一の宮・大山祇神社で越智氏や時宗僧などによって行なわれていた大山祇神社法楽連歌のことを知っていたと考えられるからだ。木藤才藏氏によれば、「越智氏の本拠は、伊予国越智郡である。この越智郡大三島に鎮座する大山祇神社は伊予国の一の宮である。その当

時、この地方の豪族である河野家や大祝家の人々は、この神社を中心にして結集し、時折法楽のための連歌会を催していた。河野家も大祝家も、もとは越智家から出たのである(10)という。ちなみに、一遍も越智氏の出身である。

宗祇の弟子の宗長も三嶋大社に立願し、歌を奉納したことを日記に記している。

「其時三嶋明神に立願申侍し。則、神前すまわちにして、同十日より三日に千句独吟、発句題四季。第一、

たなびくや  
千里もこの、の  
春がすみ 氏親  
青柳や

かげそふ三嶋  
木綿ゆうかづら 宗長(11)

一遍のように全国を遊行した僧といえ、生涯に数千体の仏像を彫った円空が思い浮かぶ。円空は一遍のように一の宮



上野国一之宮 貫前神社

をめぐることはしなかったようだが、人生の転換点を一の宮で迎えたことが知られている。そのことは一之宮貫前神社旧蔵の『大般若経』から確認できる。円空はそこに次のように記している。

「十八年中動法輪 諸天昼夜守奉身 刹那転読心般若 上野ノ一ノ宮古今新  
いくたひも  
めくれる法ノ  
車仁

## 一代蔵モ

軽クトッロケ」

延宝九年辛酉卯四月丁酉十四

日辰時見終也

壬申年生 美濃国円空<sup>(12)</sup>

判然としない文であるが、延宝九年（一六八一）に貫前神社に籠もって六百巻ある『大般若経』の転読<sup>(13)</sup>を行ない、四月十四日にその行を終えたようだ。

願意などが書かれていないので、なぜ『大般若経』転読を行ったのかわからない。しかし、破調の短歌らしきものから、宗教的な覚醒体験があったのだから、推察される。その場所以が一の宮であることが重要な意味をもっていたと思われ、そのことは「上野ノ一ノ宮」と誇らしげに書き入れていることからわかる。

## 四、教養としての一の宮巡拝

一方、江戸時代には信仰心からというより、教養・見聞を広めるために一の宮を巡拝するという風も生まれた。戦乱が収まり社会活動が活発化したことにより生活に余裕がある者が増加し、その余暇を知的好奇心の充足に向けてようになっていたのである。

江戸時代における一の宮信仰といえば、橘三喜の『一宮巡詣記』がまず思い浮かぶ。橘三喜は延宝三年（一六七五）から元禄十年（一六九七）までの二十三年間をかけて全国の一の宮を踏査し、その現状を記録して考察を加えた。

『一宮巡詣記』は一の宮研究のみならず近世の神社を知る上で第一級の史料ともなっている<sup>(14)</sup>が、この偉業の背景にも教養主義の普及があったと思われる。このことは、橘三喜と同世

代の貝原益軒<sup>(15)</sup>の紀行文からうかがうことができる。

貝原益軒は現在では本草学者として紹介されることが多いが、本来は儒学者であり、紀行文作家としても知られていた。板坂耀子氏によれば、「これらの益軒の紀行が、近世紀行文学史上大きな位置を占めており、いわゆる従来の主情的、詠嘆的な紀行ではなく、知的な情報伝達を主とした近世紀行の基礎を築いたとする指摘は早く柳田国男によって行われた<sup>(16)</sup>という。

実際、『東路記』などの貝原益軒の紀行文は、叙情性は乏しく、紀行文というより「名所図会」を読んでいるような印象を受ける。『東路記』には三嶋大社、富士山本宮浅間大社、南宮大社、建部大社、一之宮貫前神社、諏訪大社、二荒山神社、氣比神宮、嚴島神社を、『己巳紀行』では若狭彦神社、枚岡神社、伊太祁

曾神社、日前・國懸神宮、丹生都比売神社<sup>(17)</sup>を取り上げているが、その記述は次のようなものだ。

「板鼻の南に高山有<sup>あ</sup>。一の宮と云。明神有。是、上野の貫前明神なるべし」（『東路記』）  
「枚岡明神、松原の東、鬮嶺へ行道の南三町許、山の麓に社あり」（『己巳紀行』）

こうしたある意味素っ気ない記述は、貝原益軒が「自分の執筆の目的を、世の中の役にたつ



越前国一の宮 氣比神宮

実的なものを書くということと規定して<sup>(18)</sup>いたことになっている。

このような紀行文が多く刊行されたこともあって、江戸時代も半ばを過ぎると地方に住む商家の主婦なども諸国の社寺を巡る旅に出るようになった。たとえば、小田宅子<sup>いえこ</sup>は筑前国遠賀郡底意野(現、福岡県中間市)の両替商の家付き娘であったが、天保十二年(一八四一)にやはり商家の内儀であった友人3人と宮島、琴平、伊勢、信州、日光、江戸、鎌倉、諏訪、豊川など巡る5ヶ月の旅に出ている。この時、小田宅子は53歳であった。

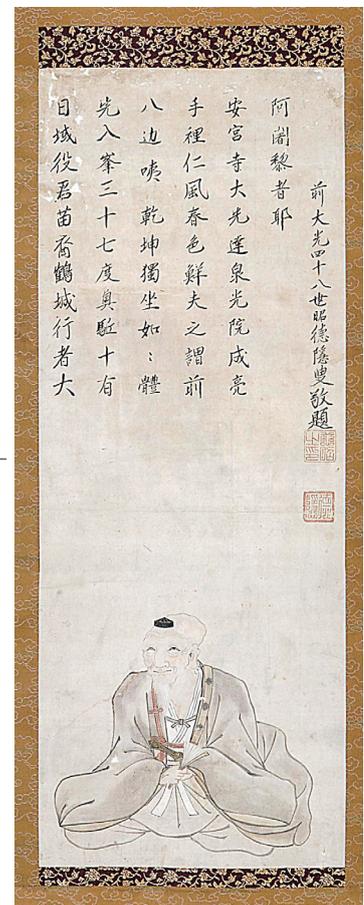
伊勢神宮・善光寺・金刀比羅宮などに加えて忌宮神社(長門国二の宮)・嚴島神社・住吉大社・熱田神宮・二荒山神社(日光)・諏訪大社・多賀大社(近江国三の宮)・上賀茂神社・下鴨神社などの一の宮(二の宮)・

三宮)を参拝しているのは、師事した国学者の伊藤常足が神職だったことの影響もあるかもしれない。

しかし、江戸後期の一の宮巡拝者として特筆すべきは、日向国佐土原(現、宮崎市砂土原町)の修験道の僧、野田泉光院であろう。

野田泉光院の旅は文化九年(一八一二)九月三日に始まり、文政元年(一八一八)十一月七日まで続いた。その目的は九峰(修験道で重視する九つの霊山、英彦山・羽黒山・湯殿山・富士山・金剛山・熊野山・大峰山・箕面山・石鎚山のこと)を登拝し、百観音(西国三十三所霊場・坂東三十三所霊場・秩父三十四所霊場のこと)を巡拝することであった。

注目すべきは数多くの一の宮も参拝していることで、その多さからみてたんに途上に一の宮



野田泉光院

があったから参拝したというのではなく、明らかに意識的に巡っている。その日記<sup>(20)</sup>から参拝が確認できるものを列挙してみよう<sup>(21)</sup>。

枚聞神社、住吉神社(筑前国)、千栗八幡宮、宇佐神社、住吉神社(長門国)、玉祖神社、嚴島神社、出雲大社、倭文神社、出石神社、籠神社、若狭彦神社、出雲大神宮、粟鹿神社(但馬国二の宮)、上賀茂神社、下鴨神社、建部大社、多賀大社(近江国三の宮)、氣多大社、氣多神社、水無神社、諏訪大社、浅間神社(甲斐国)、水川神社、二荒山神

社(宇都宮)、貫前神社、大物忌神社、鹽竈神社、伊佐須美神社(陸奥国二の宮)、香取神宮、鹿島神宮、玉前神社、洲崎神社、寒川神社、前島神社(相模国四の宮)、小国神社、砥鹿神社、熱田神宮(尾張国三の宮)、真清田神社、南宮大社、都波岐神社、敢国神社、伊射波神社、伊雑宮、日前・國懸神宮、伊太祁曾神社、丹生都比売神社、大鳥大社、大神神社、枚岡神社、伊和神社、中山神社、吉備津彦神社、吉備津神社(備後国)大山祇神社、西寒多神社、柞原八幡宮、都農神社。

野田泉光院は行く先々で托鉢を行ない、求めに応じて祈祷や占いを行なった。また、句会を開いたり弓道の教授をすることもあった。時には集まってきた者たちを相手に旅日記を読み聞かせることもあったことだ。すなわち、野田泉光院の日記はたんなる個人的な覚え書きではなく、貝原益軒の紀行文同様、人々の知見を広めるための啓蒙の書でもあったのだ。

そうした際には一の宮の意義や素晴らしさも伝えられたことであろう。そして、聞き手の中には自らも一の宮を参拝した者もいたに違いない。

注

(1) 鈴木聡子「神社年中行事の成立過程について——二十二社・一宮の農耕行事に焦点をあてて」『國學院大學研究推進機構 日本文化研究年報』第六号、平成二十五年

(2) 臼田甚五郎・新聞進一校注訳『神

楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』

(日本古典文学全集25)、小学館、昭和五十一年

(3) 福田秀一・岩佐美代子・川添昭二・大曾根章介・久保田淳・鶴崎裕雄校注『中世日記紀行集』(新 日本古典文学大系51)、岩波書店、平成二年

(4) 阿仏尼は一二二二年頃の誕生、一二八三年没、一遍は一二三四年誕生、一二八九年没である。

(5) 大橋俊雄『一遍と時宗教団』(教育社歴史新書)、教育社、昭和五十三年

(6) 神奈川県立歴史博物館編『国宝 一遍聖絵』、遊行寺宝物館、平成二十七年

(7) 『国宝 一遍聖絵』掲載の訳文による。

(8) 連歌師は禅宗や時宗の僧が多く、そうでない者も僧体であることが多かった。

(9) 前掲『中世日記紀行集』

(10) 木藤才蔵「浅茅について」『日本文学誌要』5、法政大学国文学会、昭和三十五年

(11) 島津忠夫校注『宗長日記』、岩波文庫、昭和五十年

(12) 埼玉県立熊谷図書館 [LibLetter] 第29号、平成二十四年 Autumn (九〜十一月) による(写真に基づき一部修正)

(13) 経題と経文の一部を読むことで全文を読む替わりとするもの。

(14) 残念なことに、十三巻あったとされる橘三喜の『一宮巡詣記』は現存していない。岡田正利が享保七年(一七二二)に著わした抜粋『一宮巡詣記抜粹』によってその概要が知られる。

(15) それぞれ生没年は橘三喜(一六三五〜一七〇三)、貝原益軒(一六三〇〜一七一四)である。

(16) 板坂耀子「貝原益軒『東路記』『己巳紀行』と江戸前期の紀行文学」板坂耀子・宗政五十緒校注『東路記己巳紀行 西遊記』(新 日本古典文学全集98)、岩波書店、平成三年

(17) 繁雑さを避けるため現在の社号に改めてある。

(18) 板坂耀子前掲論文

(19) 『東路日記』は嘉永四年(一八五二)筆の草稿本と安政六年(一八五九)頃の決定稿があり、決定稿が福岡県立図書館のホームページで全文閲覧できる。本稿の執筆にあたっては田

辺聖子『姥ざかり花の旅笠——小田

宅子の「東路日記」、集英社文庫、平成十六年を参照した。なお、この旅に同行した桑原久子も『二荒詣日記』を残している。

(20) 『日本九峰修行日記』。本稿執筆にあたっては石川英輔『大江戸 泉光院旅日記』、講談社文庫、平成九年を参照した。

(21) 繁雑さを避けるため現在の社号に改めてある。

著者紹介

☆渋谷申博氏(しぶやのぶひろ)

昭和三十五年、東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒。神道・仏教など日本の宗教史に関わる執筆活動をする。かたわら、全国の社寺・聖地・聖地鉄道などのフィールドワークを続けている。主な著作に『総図解よくわかる日本の神社』(中経出版)『聖地鉄道』(洋泉社)、『全国 天皇家ゆかりの神社・お寺めぐり』(G. B.)、『眠れなくなるほど面白い 図解 神社の話』(日本文芸社)『諸国神社 一宮・二宮・三宮』(山川出版社) ほかがある。

## 東日本大震災より十年を経て

(神社名 五十音順)

人々の集える所であるために

伊佐須美神社

宮司 沼澤 文彦



岩代国一の宮 伊佐須美神社楼門

東日本大震災より十年が経ち、改めて御霊の安らかなる事をお祈り致します。

当社の鎮座する会津地方で

は、平成十六年、同十九年に新潟県を震源とした大地震以来の大きな揺れでした。この地震による被害は、周知のように広きに亘りましたが、内陸である当地への被害は比較的少なく、凡そ安全とされた当地にも多くの被災者が避難され、特に鎮座地である会津美里町には、仮設住宅二五〇戸が設けられ、原子力発電所の事故により町内の殆どが警戒区域に指定された楢葉町の段階避難がなされました。遠地で頼る人もなく、よすがを求めて御社頭に手を合わせでは、故郷を遠く離れざるを得なくなった思いを涙ながらに吐露する姿が、当時職員であった私の心に今も残ります。そのような日々を送る中で、地域行事や神社の祭典への参加の機会も

作られ、大麻頒布にも廻らせて頂くうちに仲も深まり、十年を経て仮設住宅が閉所した今日でも、変わらずお心をお寄せいただく方々も多くあります。また、毎年参拝される姿を見ては安堵し、徐々に進む復興とともに新しい居住地や郷里でのお話しを伺う事も楽しみとなりました。

この様な御縁から、本年の復興祈願祭では、楢葉町で収穫された当県オリジナル酒米「夢の香」を用いて当社の神酒を担う酒蔵が醸造した清酒をお供えし、地域のキャンドルイベントとも提携して、竹灯籠の設置や同町特産の柚子の色で楼門のライトアップを行い、慰霊と更なる復興進展の祈りを捧げました。

なお、当社は平成二十年に不審火による回祿により社殿群を失い、震災発生当時は再建事業

に取り組んでいた矢先の出来事でした。幸いにしてご無事であらせられた御神儀を仮社殿に奉安申し上げ、年間の祭祀に努めておりましたが、平成二十七年に前宮司が逝去され、現在に至るまで前途多難の道程に無我夢中で再建復興に取り組んでおります。

特に、以前の観光に重点を置いた運営により、氏子の崇敬が希薄となっていた当社は、火災に続く震災の風評被害も重なって参拝者が激減。再建も復興も足踏みをしている状況下において、世の中が、震災によって人と人とのつながりが強く意識され、「絆」という認識が深まりゆくなかで、先ずは、人々が集う場所づくりが急務と取り掛かり、先代が布いた門内参入の禁を解き、往時のように何人でも自由に参拝できる態勢に戻しま

した。また、氏子・崇敬者との対話を深め、休会していた敬神婦人会の再結成をはじめ地元高校生と協力し、地域振興行事としての節分や七夕などを開始しました。

未だ風評払拭と合せ、社殿及び態勢再興の道半ばではありませんが、人々の集える場所作りを目指し、氏子崇敬者共々に御神徳を仰ぎつつ、一から神社を創っていく気持ちで神社と地域の振興に取り組んで参る所存です。

**東日本大震災より十年を過ごす  
石都々古和氣神社**

宮司 吉 田 英 高

東日本大震災発生より早くも十年が過ぎました。今でもあの時の映像等を見ますと背中が凍りつく思いです。

福島県は原発の問題もあり、



紫陽花に彩られた境内

特に浜通りの方々は今なお厳しい状況の中で生活されています。氏子の方々が懸命に努力をされている様子をみますと「私たちに出来ることは何か」と考え、福島県の復興を祈念しつつ、当神社境内地の整備を決意しました。

石都々古和氣神社は県道より約七分から八分ほど登る、通

称「八幡山」と言われる山頂に鎮座しています。山全体が境内地となっており、先ず雑草や下枝等を刈り取り、紫陽花約四千本、モミジ約八百本、それに四季折々の草花を一年中楽しめるようにと植樹しました。

そうした折、氏子崇敬者の方々から「神社参拝の時に足元が危険で、更に降雨の時などは雨水が溢れ、大変危険な状態となっています」と声を掛けられ「私たちも復興を祈念し、協力します」という温かい言葉を頂きました。平成二十三年から令和二年にかけて、約三百メートルの参道が石段二八〇段、それに石張り工事も行われ、同時に境内地石張、「希望の小径」新設など新たに生まれ変わりました。

人口一万四千人の小さな町ですが我がふるさと、神社に対す

る思いは皆同じです。コロナ禍の状況の中でも、多くの方々に御参拝頂き、「神社に来ると心が和み、元気になります」と常に温かな言葉を頂いております。自然豊かな福島県に戻れるように、私たちも希望と勇気をもって神々に奉仕したいと思っております。

尚、現在山頂神社付近は公園



美しく竣功した「希望の小径」

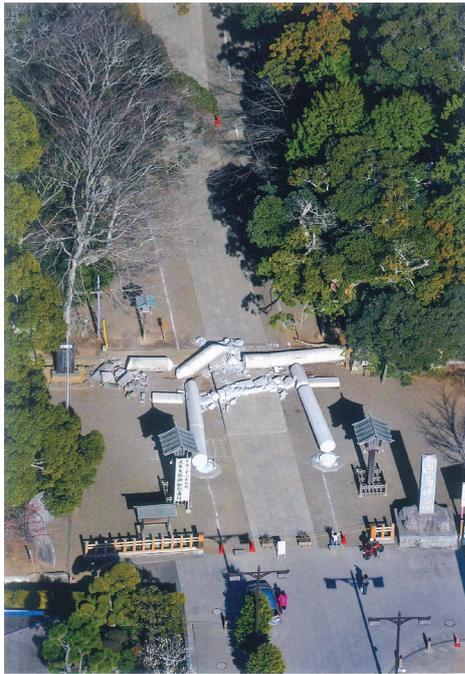
化されており自由に参拝、四季折々の花々を楽しむことが出来ます。

感佩

鹿島神宮

宮司 鹿島 則良

鹿島神宮の表参道、この場所に以前立っていた鳥居は昭和四十三年に明治維新百年を記念して建てられたものでした。茨城県笠間産の稲田石(白御影石)で作られ、国産の御影石鳥居としては日本一の大きさを誇り、



大震災で倒壊した鹿島神宮御影石鳥居

鹿島神宮の正面で神域と世俗の境たる役を果たしておりましたが、先の東日本大震災により残念なことに倒壊してしまいました。

この平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災による茨城県の震度は六弱を示し、死者行方不明者は六十六名、住宅の全半壊・一部破損は二十万件以上に及び、北茨城市の名勝・五浦六角堂の流失等沿岸部の津波被害、家屋や建築物への亀裂、屋根瓦の滑落、石塀の倒壊、造

成地の液状化現象などの爪痕を残し、道路が波打ち電気水道が停止しました。しかしながら、このような被害にも関わら

ず報道等であまり取り上げられないことから『忘れられた被災地』とも言われたものでした。

当神宮においては

大鳥居倒壊の他に御手洗池口鳥居倒壊、本殿千木の落御、灯笼六十四基の倒損壊などがありました。参拝者に被害はありませんでしたが、震災の二日前が春の大祭だったのでその時だったら……と思うと身のすくむ思いでした。

当然ながら、氏子地域である鹿嶋市・神栖市の被害も決して少なくはなかったのですが、それでも在地の氏子崇敬者には「鳥居倒壊が我々本来の被害を代替した」と仄聞され、鹿島の神が震災を越えてもなお人々に敬愛され親しまれていることは大変有難く感じました。余震も落ち着き、震災の片付



大鳥居再建竣工祭

も進んでくると、大鳥居の再建が大きな課題として残されましたが、これを震災復興の象徴と位置付け「鹿島鳥居」本来の木造での建設が決定、やがて、震災後は途絶えていた参拝者も訪れるようになり、多くの皆様より「一日も早い鳥居の再建を……」との声が寄せられ、多くの励ましとお見舞いの言葉を頂きました。

そして、平成二十三年十月に寄付金の受付を開始したところ、氏子崇敬者には被害に遭われた方も少なくない中、たくさん御芳志を賜りましたことは

大きな励みとなりました。

大鳥居の御用材は境内の杉四本を伐採し、山形県酒田市にて加工、平成二十六年二月に地鎮祭、三月に立柱祭、建方も順調に進み、平成二十六年六月一日に大鳥居の竣工祭となりました。

竣工祭当日は好天に恵まれ、各町の山車が曳き出されお囃子も賑々しく、祭典では弓馬術礼法小笠原教場奉仕の幕目の儀が大鳥居上空に美しい弧を描きました。

この大鳥居の傍らには大鳥居再建及び震災復興の奉賛をいただいた皆様の御芳名を刻んだ復興碑が建てられています。この石碑に大きく刻まれた「感佩」の文字は心から感謝して一生忘れないとの意で、大震災の困難の中にあっても鹿島神宮と共に復興を歩んだ皆様の御芳志を後

世まで伝える為この文字が選ばれました。

追伸 震災の被害を受け倒壊した御手洗池口鳥居は、再建に至らず歳月を重ねておりましたが、震災から九年たった令和二年に篤志家の奉納により再建が成りました。

この震災は大きな被害を齎した惨事でしたが、有難い氏子崇敬者の皆様方の真心を頂き復興の道を歩むことが出来、感謝の気持ちを忘れてはならないと改めて感じております。

### 改めて東日本大震災を振り返り 香取神宮

宮司 香取 武

平成二十三年三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震により、香取神宮の鎮座地する香取市では震度五強の揺れが観測され、市内の一部地域では液状



倒壊した香取神宮参道石燈籠

化現象の甚大な被害に見舞われました。

地震発生時は通常の社務時間でありましたが、これまでに聞いたことのない山鳴りとともに社殿や社務所をはじめ社全体が激しく揺れ、社務所の中でも立っているのが困難な状況でした。最初の揺れが収まるのを待ち、職員は災害時用のヘルメットを着用し、参拝者を拝殿前の齋庭へと避難誘導し、余震が落

ち着くのを待ちました。

幸いなことに重要文化財の本殿・楼門、登録文化財の拝殿には損傷はなく、参拝者および職員に怪我はありませんでした。しかし、境内の石燈籠百十一基の倒壊をはじめ記念碑や歌碑の崩壊、社号標のひび割れなど石造物に大きな被害を受けました。十一日には被害がなかった石燈籠が、夜に発生した余震で倒壊した事例もありました。

この他に建物では齋館、神庫の屋根瓦が落下、登録文化財の香雲閣の土壁が一部崩落する被害もありました。

千葉県内に於いては東京ディズニーランド近辺の浦安市が大きな液状化の被害を受けると同時に、太平洋沿岸の銚子市や旭市など甚大な被害があり、殊に旭市に於いては津波によって死者、行方不明者が出た状況でし

た。復旧のボランティアには当  
 神宮を母体として活動するボー  
 イスカウト関係者および当神宮  
 職員も参加し地域復興の一助を  
 担いました。

この年は当神宮十二年に一度  
 の式年大祭、式年神幸祭を三年  
 後に控え、記念事業をはじめと  
 した諸準備を進めている中での  
 震災であり、これに併行して順  
 次復旧作業を進めました。復旧  
 に当たりましては全国の崇敬  
 者、また各方面からの暖かい御  
 見舞を多数頂戴し、翌年には概



大震災直後の香取神宮拝殿前の様子

ね被害箇所への修復を完了するこ  
 とが出来ました。

**東日本大震災より十年を経て**

志波彦神社 鹽竈神社

宮司 鍵 三 夫

今日、大震災の記憶を辿れば、  
 被災の状況や対応、支援活動か  
 ら復興へと、限られた紙面では  
 到底語り尽くせぬものがある。  
 ここでは、当社にあって復興へ  
 の曙光となった一つの出来事につ  
 いて記すこととする。

東日本大震災発生直後の三月



陸奥国一の宮 鹽竈神社の参道

十六日、当社の日誌には、「午  
 後四時三十分、天皇陛下お励ま  
 し御言葉をテレビにて宮司以下  
 謹聴す」とある。既に電気は戻っ  
 たもののガス・水道はまだ復旧  
 せず、職員や家族の安否や神社  
 内外の被災状況の確認など目の  
 前のことで手一杯の状況下、皆  
 起立して放送を見ていた。

『被災者の状況が少しでも好  
 転し、人々の復興への希望につ  
 ながっていくことを心から願わ  
 ずにはいられません。(中略)  
 被災した人々が決して希望を捨

てることなく、  
 身体を大切に明  
 日からの日々を  
 生き抜いてくれ  
 るよう、また、  
 国民一人びとり  
 が、被災した各  
 地域の上にこれ  
 からも長く心を

寄せ、被災者と共にそれぞれの  
 地域の復興の道の手を見守り続  
 けていくことを心より願ってい  
 ます。』(一部抜き書き)

天皇陛下は、お言葉のままに  
 被災地へと向かわれた。宮城県  
 への最初のお見舞いとなったの  
 は四月二十七日。南三陸町にて  
 海に向かって深々と拝礼せられ  
 た両陛下の御姿に多くの県民が  
 感涙し、その中に操業再開を決  
 意した海苔生産者があった。当  
 時、特に漁業の被害は深刻で、  
 港は壊れ船舶を失い資材が流  
 失、操業再開など思いもよらぬ  
 ことだった。

実は、当社では宮城県内の乾  
 海苔の品質を競う奉献乾海苔品  
 評会が毎年一月に開催され、そ  
 の優賞・準優賞受賞者には皇室  
 献上の栄誉が与えられていた。  
 この皇室献上は欠年なく大震  
 災翌年に三十四回目となる予定

だった。

しかし、この栄えある伝統行事も、中止の危機を迎えていた。大津波によって海苔漁業者は生産手段のすべてを失い、次の品評会開催は絶望視されていたからである。その時、窮地を救ったのが先の操業再開を決意した海苔生産者の一言であった。「皇室献上を途切れさせてはならない。」と、呼びかけたのだ。この言葉が海苔の仲間の心に届く。「たとえ設備が不足し海中環境が激変していようと、再び海苔を作るのだ」と、多くの生産者が奮い立ったのだった。翌年、出品数は前年の三分の一にまで減少するも、皇室献上、鹽竈神社への奉獻は途切れることはなく、その伝統は守られたのである。

陛下の御言葉や御姿に励まされ、かくして復興への道のりが

始まった。

乾海苔献上の際、お取次ぎ戴いた掌典長もまた、話を聞いて涙を流された。後日、この様子が多くの海苔仲間にも伝わり、作業の励みとなっているそうだ。

日本の国柄の有難さをしみじみと実感する出来事であったと思っている。

『心構え』は「心が前」

駒形神社

宮司 山下 明

あれから十年。

震度六強の大きい揺れが、百六十秒間続きました。石製の燈籠や玉垣は崩れ、齋館、参集殿、神庫の屋根瓦が飛び上がり地面に落ちて来ます。一番心配な建物が齋館で、ご本殿の次に古い建物になります。今にも倒壊しそうにギシギシと音を立て



駒形神社 震災後復興行列

ながらゆっくりと大きく揺れ、壁や窓を落し、瓦がいったん上に飛んで崩れ落ちて来ました。天井板が落ち、壁材や土壁の剥がれ落ちたものが床一面に散乱しました。

「何をすればいい？」

「保育園の子ども達はケガをしていないだろうか？」

「齋館と参集殿の屋根は雨漏りするだろうか。」

「保育園の被害状況はどうなっているだろうか？」

「片付けはどこから手を付ければ良いだろうか？」

「小学校に通う学童クラブの子ども達はどうかやって迎えたらよ

いだろうか？」

「電気は復旧するのだろうか？ 寒いだろうか。」

「保護者にどうやって連絡を取ればよ

いだろうか？」

とに悩みながらも、まずは出来ることから、と、神社周り

でケガ人はいないか、危険な場所は無いかなど状況を把握し、水沢公園内に避難しているこども達

の無事な様子を確認し、水沢南小学校へ出向きました。こども達を連れて神社に戻り、対流式

石油ストーブを引っ張り出し、灯りや温かさを得ました。神社にあるロウソクを全て出し、要

所に点けましたが、余震があり、倒れて火災になつては困ると思ひ、止むを得ず消灯しました。

思い返せば、奇跡的にもご社殿は奉遷百周年事業で平成十五年に耐震補強をしておりましたので、祭具等が転げ落ちたり、漆喰壁に亀裂が入つたのみに留まり、参拝者や通行人にもケガ人はありませんでした。駒形こどもの杜(保育園)も新築竣工間近でしたので、耐震に問題なく、午睡中の子どもたちもパジャマのまま、外に全員無事に避難できました(震災後は普段の服装で午睡しています)。守つて戴いたのだなと、ふとした瞬間にありがたさが胸に込み上げて来ました。

夜八時ころ、最終の園児のお迎えが終わり、神社当直員に夜を託し、帰宅。自宅も新築したばかりでモノが落ちて壊れる程

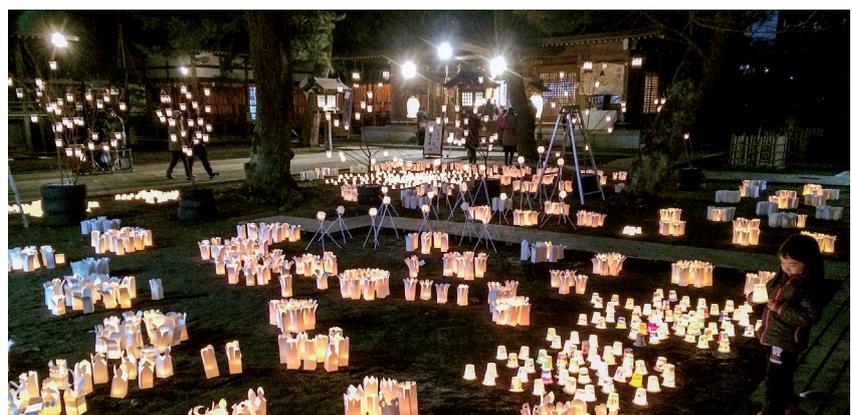
度の被害でした。驚いたのは、携帯電話でニュースを見た時でした。大津波が沿岸部を襲っていました。沿岸部の親族の事、神職仲間の事、心配になりました。

翌日、携帯電話の電池残量や車の燃料残量を気にしながら、神社と保育園と教育委員会(当時、教育委員であり、卒業式が立込む時期でした)と神社庁関連の情報収集に専念しました。三月十三日が先代山下知彦宮司の三年祭の予定でしたので、燃料が気になりましたが、お招きした方々を巡り、安否を確認しながら中止の報告をさせて頂きました。電話が通じないため、ラジオ局に行つて保育園の情報(土日は休園、月曜日からは昼食持参であればお預かり可能。など)を放送して戴き、園情報ポスターを金融機関やコンビニ

エンズストアに貼らせて戴きました。三棟の屋根全体にシートをかぶせて雨漏り対策をしました。

当時、東北六県神道青年協議会会長、岩手県会長の任期が終わりかけたところでありましたが、青年会員として支援物資を沿岸部に搬送させて戴きました。トラックは神社庁でお借りし、燃料は地元建設会社から戴き、斎館に溢れた崇敬者からの支援物資を道路開通順に運び込む作業をさせて頂きました。春木全国会長様を始め全国の青年会員様、特にも青森、秋田、山形の会長会員様にもご同行頂きましたこと、心強く思いました。仲間がいる、仲間が来てくれる、仲間が生きている、仲間が被災者のお世話をしている、全てが嬉しかったです。

「困っている人がいたら助け



境内で行われた「三・一一灯す会」の様子

たい。」道義国家としての道徳心の希薄化は嘘のよう。信号機がなくても譲り合い、困っている人に優しく声を掛け合い、必要物資も整列して受け取る。美しく素晴らしい風景でした。世界中から絶賛されたことも頷け

ます。全国一の宮の神職皆様よりも心温まる物資や義捐金を戴きました。心から御礼申し上げます。

大工や板金工は、沿岸部優先で仕事をしておりましたので、駒形神社の改修は二年越しになりました。建物三棟とも瓦からガルバリウム鋼板に変更し、石造物等も無事修理完了しました。神社と園の放射性物質の除去作業も崇敬者や保護者と協力して行いました。

崇敬者の方々より、震災のことは忘れてはいけないと「震災復興行列」や「三・一一灯す会」「慰霊祭」など行事を立案実行して戴きました。今後も地域のよりどころ、祈りの場として先人の教訓や諸先輩方のご教導を仰ぎながら、心が前向きである「心構え」をもって神職としての務めを果たして参る所存で

す。心を寄せて戴きました皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

### 東日本大震災発生より十年

#### 鳥海山大物忌神社

宮司 高橋 廣 晃

東日本大震災より十年。被害の無かった所ではもう十年、しかし大変な被害を被った所ではまだ十年といった想いでしょう。しかし時の流れとともに、当時ランドセルを背負っていた子供は学業を修めて社会に巣立ち、心ならずも故郷を離れた多くの人々の新生活はいつしかそれが日常となりました。

震災直後に当社神前でも義捐金の浄財を募り、季節毎の祭典では復旧復興がその都度祈念され、これと目立った被害の無かった当社にとっては、神事を執り行うことのできる有難



霊峰鳥海山の美しい山容

さを神職も氏子も嘯みしめました。

それが、今や世情は新型コロナ

ナウイルス一色に染まり、「感染防止」や「新しい生活様式」なるスローガンのもとに、神事が仲を執り持っていた「人と人との関わり合い」や「地域の結果」が崩れそうになっています。

昨年は残念ながら夏山登拝の受け入れを行うことができませんでしたが、今年は感染防止の対策を講じた上で、山頂御本殿、七合目御浜神社とも参籠所を含めて再開させていただきました。

例年より早い梅雨明けにて、下界は酷暑続きでしたが、連日、青空と爽風、今を盛りと咲き誇る高山植物の群生が、登拝する参詣者を癒してくれる。お山の神様への参詣のためにと登る「登拝」。自分自身の楽しみを第一とする「登山」とは似て非なるところがあります。画面越しに「映える」風景ばかりではな

いが、自然の中に身を置き、お山の神様に包まれながら一歩一歩を踏みしめる瞬間に、祈りがある。

あの日、あの時、あの人向き合う事もできる。いま、改めて思いを致す節目を迎えました。

最後にまだまだ復興なされていない皆様に対し一日も速く元の生活に戻れますようにお祈り致します。

### 早くも十年、長き十年

都々古別神社(馬場)

宮司職 角田和弘

超大地震は、大津波、殊に原発事故を誘発、復興施策に大変な支障となる大惨事でした。あの時、全国からの御見舞・激励が各方面から多数寄せられ、神社界からも、ご支援・お気遣いのメッセージをいただき、誠に感謝の思いです。御礼申し上げます



都々古別神社(馬場) 御社頭

ます。

未曾有のことゆえ、手探りの状態。夢中であり、振り返れば大変なストレスの中、その後、その間の諸々の動きは各種報道等でご覧いただいたことと存じます。言わば遠方の、信じられない状況に驚愕、近辺の大変な状況はしばらく後、ようやく報道に載ってきた、という有様で

した。

地元も大変な状況、その対応等に追われていて、原発の危機的タイミングにもいささかタイムラグが生じ、ともかく行動策、間一髪、結果、大問題を回避、今に至っております。

原発から約七十km、極限の被災地の方々には無礼ながら、風向きにより、県南地方は辛うじて無事でありました。

あらためて当地方は岩盤の堅固な、常陸から陸奥南部の各種災害の少ない所の一つのように、地質学的に、東北日本・西日本日本の境目にも関わる、特殊な所の一つと言われ、社殿等の損傷も少なく済んだのは幸いでした。古代人の動き、チカツ系、ツツコワケ系の広がり、文化の伝播、神仏習合、武将達の関わりの深い土地柄であったようです。

その後、被災地への救援、不眠不休の必死の任務にあたった

多数の方々の御陰で、次第に復興の道筋に乗れたわけですが、神社には色々な思いの方々が訪れました。東日本への見舞い、安寧祈願等々……復旧復興の様子を気にかけて下さった方々。中には救援活動をして下さった

消防、警察、自衛隊等々、早期復興の祈りの思いで再訪、深く神祈りされ、また、東北地方への注目、古代からの歴史への関心、再認識等々、時空を超えた「日本」の、見えるもの、見えないものを感じ取っていくような方々も居られたようです。

宇宙物理学者の立場で「神の存在」の感覚を語っていた方、西洋文化との共通性・関連性を話されていた方、その他、病・生死に関わる感謝、不思議な現象のこと、自身のルーツ訪ね、

逸話は尽きませんが、全国を主に徒歩で、また、実用自転車です。巡っている、などの達者な方々……。感服するばかりです。

今、参拝者もマナーがよく、多くは巡拝の趣旨に沿った参詣、新型コロナ問題対応や異常気象で整備ままならぬ状況、過疎化、高齢・少子化の昨今、ご理解・ご協力下さり、世相や災害の、大きな変化の中、人々の無病息災、守り給え、幸え給え、と願うばかりです。

**「被災地・ふくしま」の庁長として思うこと**

福島県神社庁

庁長 丹 治 正 博

(福島稲荷神社宮司)

今や福島といえますと、先の大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により世界中にその名を知られるようにな

りました。大震災から満十年と半年が経過しましたが、今の福島はどうなっているのか、復興は進んだのか、原発の廃炉に伴う処理水の問題や、除染で出た除染土の処理の問題、そして無くならない風評被害の問題など、福島からお伝えしたいことは山ほどあります。

皆さんも耳にされておられると思いますが、東京オリンピックで来日した韓国の選手団が選手村で提供される食事には放射能で汚染された福島県産の危険な食材が使われているとして、韓国独自の給食センターを開設するという残念なニュースが伝えられました。この報道に対して福島県の内堀知事は、会見で本当に残念なことを怒りを抑えながら次のようにコメントしました。

「本県の生産者が努力、努力、

努力を重ねてきました。農地除染、安全対策、徹底したモニタリング検査、データ公表、福島県の総力を挙げて取り組んできました。日本の放射線物質の基準は世界一厳しく、それを超えるものは玄米であれば六年連続、野菜や果実は八年連続、畜産物・栽培山菜は九年連続、基準値を超えるものは出ていません。これが事実であります。」私も復興五輪を掲げるオリンピックのホスト国日本に対する許しがたい非礼と感じました。そんな中、福島で初戦が開催された女子ソフトボールの米国代表監督が、福島で食べた桃の味を絶賛した記事がSNSで拡散されました。コロナ禍によって復興五輪は色褪せたかに思いましたが、私も福島の人間にとつてこれほど嬉しいニュースはありませんでした。

もう一つの悩ましい問題は、廃炉作業が進む原発から出続ける処理水の問題です。今年の四月に政府は海洋処分という方針を決定しました。やはり地元漁業関係者からの反発は非常に大きいものであります。漁業以外の関係者の不安も相当あります。私たち地元の間は、世界中のどの原発でも行っているトリチウムを含む処理水の海洋放出の事実を知っています。また、現在千基を越えている処理水タンクの貯蔵量は東京ドーム約一杯分にあたりますが、この処理水の中に存在するトリチウムの総量はわずか十五グラム、大体目薬一個分弱くらいの量で、これを更に世界基準より大幅に稀釈して海に放出する訳で、人体や生態系への影響はまず考えられないことを知っています。しかし、反対する意見の

大半は、処理水の科学的安全性を疑うというより、風評被害を懸念するものなのです。漁業者に言わせれば、国は処理水の安全性を俺達に説明するんじゃない、と訴えています。要は、自分たちが取った魚が買ってもらえなくなるのは、消費者の考えだから、消費者に理解させるの



双葉町中野に竣工した「合祭殿」

が、国の仕事だろうとの意見で、風評被害を起こさせないようにする国の対策に納得がいかないから反対となっているのです。このように、誤解や偏見を糾して、正確な情報を認識してもらうことが、風評払拭の本質であるところであらためて感じています。福島県では、原子力災害による帰還困難区域に指定された地域に今なお約四十社の神社が取り残され、また、津波で全壊、流出した約三十社の再建の目処も立たぬまま大震災から十年の歳月が経過しました。この間、帰還困難区域内の神社は言うに及ばず、避難指示が解除された地域においても氏子の帰還が進まぬ厳しい状況が続いており、地域の人々の心の拠り所であり、コミュニティの核としての役割を果たしてきた神社の継承はいまや風前の灯火となってい

ます。こうした神社を遙拝する施設「合祭殿」の構想は、大震災直後より将来に亘る神社信仰継承の観点から検討が続けられてきました。詳細な経緯は、今年五月に齋行された地鎮祭の様を神社新報に寄稿した拙文をご覧ください。去る九月十四日、福島第一原発にほど近い双葉町中野地区において「合祭殿」の竣工奉告祭が齋行されました。合祭殿に与えられた役割は、いつの日か必ず故郷の神社でのお祭りを復興させたい、との氏子の人々の強い思いにも配慮し、あくまで各神社の遙拝施設として供されるとともに、避難されている地元の氏子さんを集めて祭礼を行う場として活用する際は、その都度、降神という御祭神をお迎えする形式で齋行し、各神社の御神体実物は奉斎しないことが申し合

わされました。それは、十年たってもまだ再建が進まない神社氏子の復興への意欲を削ぐことのないよう配慮したものです。宮司や氏子の高齢化など、神社を存続させるための課題は、いまや少子高齢化、過疎化の進展とともに全国的な課題となっており、神社存続のため、神社の合併も進められています。原子力災害に伴う福島県の現状は、こうした動きを先取りした形になっており、合祭殿という考え方は、全国神社界における初めての事例となる試みと信じます。今後、二十年から三十年と言われる復興までの長い歲月、神社と氏子をつなぐ「絆」の施設として活用出来るか否か、今に生きる私たちの覚悟と今後の頑張りが問われています。

**『一万人のお宮奉仕』  
全国の神社でお掃除活動を広げ日本の心を次代へ繋げよう**

平成二八年に発足した「和合友の会・和の道」から生まれた奉仕団体。昨年六月より本格的に関東・関西・岡山を中心に始まりました。

○理念『自然の恵みと繋がる命に感謝し、愛と喜びをもって和合し、奉仕の心を広げる』

○五方良しの五奉仕『神様にお喜びいただく』『神社がにぎわう』『ご先祖様への御恩返し』『参拝者が気持ちいい』『自分の心が磨かれる』

この合言葉を掲げ、約一年半で十四社の「一の宮」他二十一社、延べ九十社で千五百名を動員しています。

活動は、正式参拝後に清掃活動、午後は神職講話と心みがき会と称して、感謝して日々生きる日本古来の心の在り方を共に学ぶ場として、多くの神社にご賛同いただきご協力賜っています。

団員は、長い年月に亘り肅々とお守りいただいている神職に感謝し、氏神様を大切にして神と共に生きる本来の和の心を次代に伝え

ていこうと、若い世代にも呼び掛けています。

活動の様子は『和合』にも毎回掲載され、各お宮の責任者である団柱（世話人）の紹介も。

九月には大阪西南ロータリークラブからの依頼を受けて坐摩神社にて、またパラリンピック閉会式総合演出の小橋賢児氏の呼びかけで若手二十名が日枝神社にて等々様々な分野の方に共感いただき、その輪が広がってきています。

○参加者の声「普段の生活で有難



大和国一の宮 大神神社



河内国一の宮 枚岡神社

いと気が付く事が増えた」「神社と繋がる事で、この国の成り立ちを学び感じる」「神社でのお掃除は究極のマインドフルネス」「心を見つめながらお掃除すると本当の自分と繋がる感覚になる」「鳥の声、風を感じ、虫達と出会い、全てが調和されると気持ちいい」「宮司様達の努力と氏子さん達の支えがいる場所だと感じた」

「全国各地の神社が何千年、何百年と繋がっているからこそ、伝統や文化が守られ、国民性が守られている。日々、祈りを捧げておられる宮司様はじめ神職の方々には、感謝の気持ちで一杯です」と代表の塚田昌久。

どなたでも初穂料千円と法被代など運営費含めて二千元で参加できます。団員は初穂料のみで、清掃後の「心みがき会」や「神社を学ぼう」などの講座で学びます。皆様の参加費の一部を神社基金として役立てていきます。

一社につき十五名〜二十名、お掃除させていただける神社をご紹介します。

【活動実績】大神神社・伊弉諾神宮・坐摩神社・枚岡神社・大鳥大社・籠神社・伊和神社・出雲大神宮・丹生都比売神社・吉備津神社・真清田神社・寒川神社・氷川神社・玉前神社

**『一万人のお宮奉仕』**

事務局

大阪市北区大淀中二―一―一五階  
☎〇九〇―一九一七―九六六〇

清水有子



淡路国一の宮 伊弉諾神宮

全国一の宮会名簿③

☆北海道・東北地区

国名	神社名	一宮祭神	鎮坐地
蝦夷地	北海道神宮	大国魂神 大那牟遲神 少彦名神 明治天皇	北海道札幌市中央区宮ヶ丘四七四
津軽国	岩木山神社	顕國魂神 多都比姫神 宇賀能賣神	青森県弘前市百沢字寺沢二七
陸奥国	駒形神社	大山祇神 坂上刈田麿命	岩手県奥州市水沢区中上野町一八三
出羽国	鳥海山天物忌神社	天物忌神	山形県飽海郡遊佐町吹浦字布倉一
陸奥国	鹽竈神社	鹽土老翁神 武甕槌神 経津主神	宮城県塩竈市一森山一一一
陸奥国	郡々古別神社(八槻)	味耜高彥根命 日本武尊	福島県東白川郡棚倉町八槻大宮二三四
陸奥国	郡々古別神社(馬場)	味耜高彥根命 日本武尊	福島県東白川郡棚倉町棚倉字馬場三九
陸奥国	石都々古和氣神社	味耜高彥根命 大国主命 誉田別命	福島県石川郡石川町字下倉字九六
岩代国	伊佐須美神社	伊弉諾尊 伊弉冉尊 大毘古命 建沼河別命	福島県大沼郡会津美里町宮林甲四三七七

☆関東地区

国名	神社名	一宮祭神	鎮坐地
常陸国	鹿島神宮	武甕槌大神	茨城県鹿嶋市宮中二三〇六一
下総国	香取神宮	経津主大神 武甕槌神 比賣神 天兒屋根命	千葉県香取市香取一六九七
上総国	玉前神社	玉依姫命	千葉県長生郡一宮町一宮三〇四八
安房国	安房神社	上の宮(本社)天太玉命 天比理刀咩命 下の宮(摂社)天富命 天忍日命	千葉県館山市大神宮五八九
安房国	洲崎神社	天比理乃咩命	千葉県館山市洲崎一六九七
武蔵国	水川女體神社	須佐之男命 稻田姫命 大己貴命	埼玉県さいたま市大宮区高鼻町一四〇七
武蔵国	水川女體神社	奇稲田姫命 大己貴命 三穗津姫命	埼玉県さいたま市緑区宮本二一七一
知知美国	秩父神社	八意思兼命 知知夫彦命	埼玉県秩父市番場町一一一
相模国	寒川神社	天之御中主神 秩父宮雅仁親王	神奈川県高座郡寒川町宮山三九一六
相模国	鶴岡八幡宮	寒川比古命 寒川比女命	神奈川県鎌倉市雪ノ下二一一三二
甲斐国	浅間神社	応神天皇 比売神 神功皇后	山梨県笛吹市一宮町一ノ宮一六八四
上野国	一之宮貫前神社	木花開耶姫命	群馬県富岡市一ノ宮一五三三
下野国	宇都宮三荒山神社	経津主神 比売大神	栃木県宇都宮市馬場通り一一一一
下野国	日光二荒山神社	豊城入彦命 相殿 大物主命 事代主命 大己貴命 心姫命 味耜高彥根命	栃木県日光市山内二一三〇七

☆北陸地区

国名	神社名	一宮祭神	鎮坐地
若狭国	若狭彦神社	若狭彦神社(上社) 彦火火出見尊	福井県小浜市龍前二八一七(上社)
越前国	氣比神宮	若狭姫神社(下社) 豊玉姫命	福井県小浜市遠敷六五一四一(下社)
加賀国	白山比咩神社	伊奢沙別命 仲哀天皇 神功皇后 応神天皇 日本武尊 玉姫命 武内宿禰命	福井県敦賀市曙町一一一六八
能登国	氣多大社	白山比咩大神 菊理媛尊 伊弉諾尊 伊弉冉尊	石川県白山市三宮町二
越中国	高瀬神社	大己貴命 天活玉命 五十猛命	石川県羽咋市寺家町ク一一
越中国	氣多神社	大己貴命 奴奈加波比売命	富山県南砺市高瀬二九一
越中国	雄山神社	伊邪那岐神 天手力雄神	富山県中新川郡立山町立山峰一(峰本社)
越中国	射水神社	二上神	富山県中新川郡立山町岩崎寺二(中宮折願殿)
越後国	彌彦神社	天香山命	富山県中新川郡立山町岩崎寺一(前立社壇)
越後国	居多神社	大国主命 奴奈川姫 建御名方命	富山県高岡市古城一一一
佐渡国	度津神社	五十猛命	新潟県西蒲原郡弥村弥彦二八八七一二
			新潟県上越市五智六一一一一
			新潟県佐渡市羽茂飯岡五五〇一四

【人事】(令和二年七月一日〜令和三年六月三十日)

- 〔就任〕
- 天澤 眞博氏 佐渡国一の宮 度津神社 宮司就任 令和二年十二月二十五日
  - 間島 誉史秀氏 蝦夷地一の宮 北海道神宮 権宮司就任 令和二年十二月三十一日
  - 金田 祐季氏 因幡国一の宮 宇倍神社 宮司就任 令和三年三月十六日
  - 植松 英生氏 伊豆国一の宮 三嶋大社 権宮司就任 令和三年四月一日
  - 吉野 尊次郎氏 周防国一の宮 玉祖神社 宮司就任 令和三年四月十五日
- 表彰規程第二条第二号(特級昇進)
- 松本 正昭氏 越中国一の宮 射水神社 宮司

- 表彰規程第二条第一号
- 山本 行恭氏 伊勢国一の宮 椿大神社 宮司
  - 神武 磐彦氏 摂津国一の宮 住吉大社 権宮司
  - 鳴瀬 道生氏 長門国一の宮 住吉神社 宮司
  - 小野 崇之氏 豊前国一の宮 宇佐神宮 宮司
- 表彰規程第三条第二号
- 吉田 律子氏 武蔵国一の宮 水川女體神社 宮司
  - 渡部 吉信氏 越後国一の宮 彌彦神社 宮司
  - 江熊 康夫氏 備後国一の宮 素盞鳴神社 宮司
  - 金子 宗生氏 下野国一の宮 日光二荒山神社 禰宜
  - 植松 真芳氏 甲斐国一の宮 浅間神社 禰宜
  - 近藤 優氏 陸奥国一の宮 志波彦神社 鹽竈神社 禰宜
  - 岩田 健司氏 伊勢国一の宮 椿大神社 禰宜
  - 森脇 哲彦氏 駿河国一の宮 富士山本宮浅間大社 禰宜
  - 飯田 博信氏 大和国一の宮 大神神社 禰宜

- 〔神職階位浄階検定合格〕
- 岩崎 和夫氏 三河国一の宮 砥鹿神社 宮司 令和三年三月一日
  - 鮫島 秀礼氏 大和国一の宮 大神神社 権宮司

【帰幽】(令和二年七月一日〜令和三年六月三十日)

- 金田 誠氏 因幡国一の宮 宇倍神社 宮司 令和三年一月十五日
- 物部忠三郎氏 備前国一の宮 石上布都魂神社 宮司 令和三年四月三日

沿革③は次号に掲載いたします

# 「和」と神社の幸せ情報誌 『和合(WAGO)』定期購読のご案内

日本人が古来より生活のなかで実践してきた「神の道」の素晴らしさ、神社の清々しき、世界観は日本文化の精神の粹であります。

『和合』は、人々の持続可能な幸せな暮らしのため、広く世の中に「日本の心を伝える」ことにより、多くの人々が地域社会の発展や文化交流に心を寄せ、更には我が国の素晴らしさを再発見していただき皇室、国家の発展はもとより世界の共存共栄を期する企画が詰まった情報誌です。

オールカラーで美しい写真の数々と神道、神祀り、芸術文化、森羅万象の自然観を中心とする企画記事の数々は読者を幽玄の世界へ導き、楽しませてくれることでしょう。

毎号の誌面には必ず「全国の

一の宮」特集が生まれ、読者への一の宮の魅力を存分に伝えております。

定期購読がお得ですので、この機会に是非お申し込みをご検討下さい。

定価 一、一〇〇円(税込)のところ一、〇〇〇円(税込)で頒布。二十冊以上のお申し込みで更にお得になります。

左記へお問い合わせ下さい。  
発行 偶庵『和合(WAGO)』

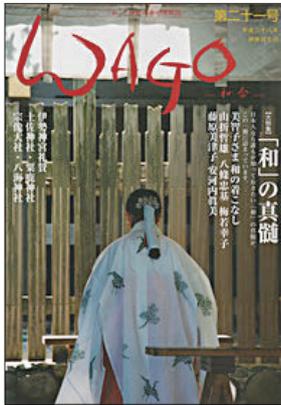
編集部

〒103-0004 東京都中央区東日本橋

二一-二一四 二階

☎〇九〇-三八一七-七三六〇

FAX 〇三-五八〇九-一七八三



# 書家 信貴 聖玉(黎香)氏 全国一の宮 揮毫作品奉納巡拝

信貴聖玉氏は幼少より書の道に勤しまれている敬神の念篤き若手芸術家です。

各地の書道展に入賞され、有望株として書界に新風を吹き込むとともに存在感溢れる実力も兼備されています。

今後の活動として、本年より神代の息吹を感じる「全国一の宮」に世の安寧と発展を真摯に祈り捧げたいと思い定め、自身の作品を奉納巡拝をする決意を固められました。

今年は大和、淡路、出雲、石見の各国一の宮を皮切りに、これから全国一の宮を巡拝されます。

会員各神社に於かれましては信貴氏の神徳宣揚にかけられる篤い思いをお汲み取りいただきまして、奉納参拝時には温かくお迎え下さいますればと存じます。



信貴聖玉氏 近影

プロフィール  
大阪府和泉市 在住  
當麻寺 宮下寛昇住職を師事  
書道歴三十七年 指導歴二十一年  
台日芸術博覧会2021 彩華賞  
第二十七回雪舟国際美術協会展名誉会長賞など受賞歴多数



淡路国一の宮 伊弉諾神宮奉納揮毫  
本名孝至宮司と信貴氏

### 全国一の宮朱印帳と巡拝達成記念品「文庫」について

当会では、「全国一の宮御朱印帳」大小二種【当会オリジナル(小)、一の宮巡拝会(大)】を携えて全国一〇一社の宮巡拝を終えられた方に、巡拝達成記念品「文庫」を贈呈しております。

心を込めて巡拝成された信仰の証である朱印帳を子孫への無言の訓として家宝として永く保存していただけたらという思いから平成二十八年九月より全国一の宮会より各会員神社を通じてお頒けしております。

会員各神社におかれましては、右当会指定の御朱印帳を持参され巡拝達成報告にお申し出の崇敬者の方には、全国一〇一社御朱印押印を確認の上、条



(左) 一の宮巡拝達成記念品文庫と (右) 当会オリジナル御朱印帳

件を満たしていれば左記要項をご記載いただき事務局までご連絡下さい。巡拝達成者の方に「文庫」拝送のお取り次ぎを事務局にて致します。

#### ◎ご連絡事項

- ①巡拝達成者の氏名・住所・電話番号
  - ②文庫大・小の別
  - ③お取り扱い神社名・ご担当者
- 贈呈開始より令和二年六月三十日迄の約三年間で巡拝達成報告者は一〇七名でした。(年平均三五名達成)

令和二年度は二三名より巡拝達成のご報告をいただき「文庫」を贈呈致しました。

事務局では今後、巡拝達成された方々よりお喜びの声を皆様にお届け出来ればと考えております。

### 頒布品のご案内

#### 【全国一の宮御朱印帳】①

全国に鎮座する一の宮の御朱印を一冊に授かれる一般的なコンパクトサイズの御朱印帳です。

中には、一の宮の所在地表も同封されており鎮座地を確認することができます。

(会員神社卸価格 〇〇〇円)

#### 【全国一の宮めぐり】②

ポケットサイズのコンパクトながら、全国一の宮の情報満載！

全国一の宮を網羅するポケットに収

納しやすいB6手のひらサイズで、巡拝の相伴に最適の一冊。

(会員神社卸価格 〇〇〇円)

#### 【旅する一の宮】③

「全国一の宮巡拝をもっと気軽に楽しく」をコンセプトに編輯した公式ガイドブック第二弾。巡拝に役立つコラムなど満載。「一の宮」を中心とした「旅」を提案する一冊。

(会員神社卸価格 〇〇〇円)

#### 【御朱印帳 特製巾着袋】④

御朱印帳(小)がすっぽり入る巾着袋でブルーとピンクの二種。

ブルーは青海波、ピンクは雲立涌の文様に「一の宮」の文字を随所にあしらった気品溢れる柄です。西陣織で奉製しております。

(会員神社卸価格 〇〇〇円)



③旅する一の宮 ②全国一の宮めぐり ①御朱印帳



④特製巾着袋

#### 編集後記

☆新型コロナウイルス感染症の蔓延状況は沈静化の様相は見せず世界中に猛威を振るい、未だ元の生活に戻る兆しはありません。

☆先ずいで、因らずもウイルスに罹患された方々に御見舞い申し上げます。貴い命を落とされた皆様に哀悼の意を表します。

☆全国の神社では、神の御前にて奉仕する祭儀は変わらず肅々と厳修されていること存じますが、人と人との繋がりや賑わいを実感する行事が中止、若しくは縮小されるようになってから二年近くとなります。

☆その間、これまで当たり前であった事が、そうでなくなったことにより、日常への有難さを高一層に感じます。

☆新たな日常の中から、未来志向の繋がり方が研究開発されたり、嘗ての暮らしから人同士の繋がりを直す動きもあります。「稽古照今」の精神について改めて思い致すこの頃です。

☆渋谷申博先生には今号にも玉稿をお寄せ下さり感謝申し上げます。旅と信仰・文化として一の宮信仰の原点に思いを馳せた次第。

☆本年は未曾有の大災害となった、東日本大震災発生より十年が経過。目に見えるもの、見えないものも多くを失った災害でしたが、便利な暮らしと引き換えに失いかけていた、心の繋がりがあつたり、自然への畏敬の念など改めて感じさせてくれたのもこの大災害でした。

☆今号では東日本、被災地にて奉務の会員各位よりこの十年間を振り返り、玉稿を寄せて頂きました。記憶を風化させず伝えていくことは、神祀りの精神にも相通じます。

☆第十代崇神天皇の御代、疫病により国内が大いに乱れたことは高承の通りであります。そこで天皇は歴代天皇の天・宸(あまのみくら)を知らしめたる根源を求められ、神と人とを司牧(つかさど)へて、現代に至る神祇制度の基を立てられました。

☆全国に鎮座する会員奉務神社では連綿と太古の精神によって日々疫霊鎮圧の祈りが捧げられていること存じます。

☆令和四年度総会は誠の祈りが相通じ、全国会員寄り合ひまして感謝の味酒を酌み交わしたいと思います。

☆茲に『日本国一の宮』第三号をお届け致します。(事務局 高)